

## 彼と彼女の風景

「このお店」と言うと、彼女は小走りに店の中に入って行った。  
江ノ電の和田塚駅から数分歩いた所に、その店はあった。

彼女に続いて店の中に入ると、お香の匂い。

リングやブレスレットなど、いろいろなアクセサリーが並んでいる。手にとっては品定めをする彼女に並び、彼も陳列してあるものを眺めるが、どれも彼の興味をひくものではなかった。

30分ほどそうしていたのだろうか？

「これにする」

彼女が言ったので、彼は頷き店の外に出た。

彼は、お香の匂いが余り好きではない。  
一刻も早くこの店から出たかったのだが、彼女をひとりにしておくのも悪いので、ずっと我慢していた。

外は夏の日射しで眩しいくらいだ。  
すぐに彼女が出て来るかと思ったが、数分待った。

「次はどこに行く？」

彼は出てきた彼女に尋ねた。  
女の子と二人で知らない町を歩くことなど初めてなので、彼はどうして良いのか分からない。

「海を見に行こうよ」

彼女の言葉に従い、二人は細い道を南に向かった。

微妙な距離を保ったまま歩く二人の脇を、自転車に乗り、サーフボードを抱えた若者が通り過ぎた。

路肩に寄ったのをきっかけに、彼は彼女の手をとった。  
何か硬いものを感じたので、彼は繋いだ手を目の前に持ってきてみた。

「これが欲しかったんだ！」

少し恥じらいぎみにそう呟く彼女の指には、二人の名前を彫り込んだリングがあった。

肩をたたかれて彼は振り返った。春先の午後6時30分、彼は地下鉄に乗っていた。

そこには彼女がいた。

小学校5,6年生の時の同級生で、中学から私立に進んだから、会うのは8年ぶりだろうか？

彼がまだ食事を済ませていないのを知ると、彼女は一緒に飲みに行かないかと彼を誘った。

関内で地下鉄を降り、二人並んで、馬車道側に100m位行った所にある店に向かった。

そこには、彼女のボトルがキープしてあるという。

彼女お薦めの美味しそうなたまみを選んでもらい、再会に乾杯してウイスキーを飲み始めた。

彼女も大学に通っているらしいので、校名を聞いてみて驚いた。

女子大としては日本のトップと誰もが認める所だ。  
小学校の時から夢だった学校の先生になるべく、猛勉強してきたのだ  
と言う。  
かろうじて大学には入ったものの、将来の事など何も考えていない彼と  
はえらい違いだ。

飲み進むうちに彼女は、ごく最近、つきあっていた男に振られた事を打  
ち明けた。  
彼もその頃にはかなり酔いが回ってきていたのか、その男の事を罵り始  
めた。  
「こんな良い女を振るなんて、バカじゃないの！」  
彼女も調子に乗って、彼のウイスキーを煽らせ、次々に水割りを作っ  
た。

二人でボトル2本を空にした頃、その店を出ることにした。  
支払を済ませ外に出ようとする彼に、彼女はバッグを預け、  
「トイレに寄るから先に出ていて」  
と言った。

彼は一人表通りに出て店の看板にもたれ、彼女を待った。

その看板には「どん底」と店名が大書してあった。

平日の午前7時15分。彼は閑静な住宅街を地下鉄の駅に向けて歩いて  
いた。細い裏通りなのでほとんど人が通っていない。彼の足音だけが響  
いている。もうすぐ高校に入って半年になる彼は、毎日決まってこの時  
間にこの道を通っていた。

歩いている彼の5m程先、通りの右側にある家の玄関の引き戸が開き、  
まだ眠そうな顔をした彼女が出てきた。右足の靴をきちんと履いて背筋  
をまっすぐに伸ばすと、すぐ目の前に彼がいた。

彼女と目が会うと、彼は微笑みながら「おはよう」と言った。突然挨拶  
された彼女は少しびっくりしたような顔をしたが、すぐにとびきりの笑  
顔になって「おはよう」と返した。

二人は3月迄同じ中学に通っていた。あまり話す機会は無かったが、小  
学校も同じだったので、互いに良く知っている。彼女が通う高校は、彼  
が通う高校への通学路の途中にあるが、今迄行きも帰りも会ったことが  
無かった。

さらに言葉を続けようと、彼女の唇が動きかけた時、母親が家の中から  
彼女を呼んだ。

左肩ごしに振り返る途中で彼女の笑顔が消え、半ば怒ったような顔つき  
になるのを見ながら、彼はそのまま歩いて行った。

午前7時13分

彼女は玄関にある鏡で髪型を整えている。彼女がいつも家を出るのは7  
時30分頃だが、今週一杯は、土日に行われる文化祭の準備で少し早く  
家を出なければならない。

昨日の朝玄関を出たら彼にばったり会った。それも向こうから挨拶され  
てしまった。あまりおしゃべりが得意でない彼女は、中学時代から彼の

ことが気になっていたが、話し掛けられずにいた。

物凄いチャンス！ 彼の通う高校は私の高校の一駅先だから、毎日一緒に行けるかもしれない！ 昨日だって母親が呼び止めなければ一緒に行けたのに！

そう考えた彼女は、今日はいつになく早起きして登校準備を済ませ、こうして玄関で彼が来るのを待っている。外に出て彼が来るのを待っているかとも思ったが、昨日のように偶然会ったことにした方が話が弾みそうな気がした。通りに響く足音がだんだん近付いて来る。彼の足音だ。間違いない。

今日は私が先に「おはよう」って言って、一緒に並んで歩こう。週末の文化祭にも誘ってみよう。

そう決めた彼女は満面の笑みを浮かべて玄関の引き戸を開け、外に飛び出した。

視聴覚教室を出た二人は、並んで階段を降りていた。彼は文化祭に誘われ、昼前から彼女の高校に来ていた。

「最後に出た女性二人組は、かなり良かった」

と彼が言うと、

「休みの日には、たまに伊勢佐木町で路上ライブをやっているみたい」

と彼女が続けた。

「ボーカルもうまいけれど、八モを付けている子のセンスが良い」

彼の方を見ながら階段を降りていた彼女は、最後の1段を踏み外した。彼は彼女の手を取って支えようとしたが、バランスを崩して二人で倒れてしまった。彼女を支えきれなかったものの、彼は自分の腕を彼女の頭の下に差し込むことだけはできた。

人目を気にして真っ赤になり座り込んでいる彼女の手を、先に立ち上がった彼が引き上げた。

「腹が減ったから外に食べに行こうか？」

昼食に焼きそばしか食べていなかった彼は、きまり悪そうに自分の服をパタパタ叩いてる彼女にそう言った。彼女は小さく頷いて、彼について行った。校門を出て左に折れ、200m位進んだ所にあるデニーズに、二人は入った。

早めの夕食を済ませた頃には、彼女は普段の彼女に戻っていた。

「もう一度学校に戻る？」

と彼が尋ねると、もう彼女のクラスの出し物は終わったので戻る必要がないと言う。

「じゃあ散歩に行こう」

デニーズを出た二人は日曜日で混み合う中華街を抜け、人形の家のからくり時計を見てから山下公園に出た。手すりにもたれて氷川丸と海をしばらく眺めたあと、彼女が言った。

「シーバスに乗ってみたい？」

「いいね！ 乗ってみるか。乗るなら左側だな」

彼は、嬉しそうにそう答えた。

「とっても久しぶり」と彼女が言った。

夕暮れ時の横浜港。ゆっくり進むシーバスに二人は乗っていた。  
彼女は小さい頃、九里浜と金谷を結ぶフェリーに乗って外房まで海水浴に出かけたことがあった。  
その時は真っ青な空と海に感動したが、暗くなってから船に乗るのは初めてだ。

彼の言うように左側の窓際の席に並んで座ると、みなとみらいの夜景がとてもきれいに見えた。  
「とってもきれい」  
思わず彼女の口から出た言葉に、彼も同意した。  
彼には、夜景を見ながら嬉しそうに微笑む彼女の顔もとても可愛く思えた。

赤れんが倉庫からみなとみらい向かって進み、だんだん観覧車が大きくなってきた頃、右隣に座っている彼がつぶやいた。  
「俺と、つきあってくれないか？」  
一瞬驚いたように彼の目を見たあと、彼女は視線を観覧車に戻し、静かに頷いた。

彼女の視線の先にある時計は、6時28分を示していた。

「いったいどこに消えちゃったのよ？」

彼女の前の席に座っている友人が振り向きながら言った。  
「階段の下で誰か騒いでいると思ったらあなたが座り込んでるし、そのあと二人でどこかに行っちゃうし」

その友人は夏休み明けの席替えで彼女の前の席になった。それ以来、休

み時間になると良く話すようになった。  
「横を見ながら階段を降りてたら、踏み外して転んじゃったの」  
「横じゃなくて彼の方を見ながらの間違いじゃないの？」

友人はニヤニヤ笑いながら続けた。  
「文化祭が終わったら皆で集まって一緒に帰ろうって約束忘れてたの？」  
「あっ...ゴメン、すっかり忘れてた」  
「もお...で、彼と二人でどこに行ったの？」  
「彼と二人って言うけどさ、あの時はまだ彼じゃなかったんだよね」  
「あの時はまだあ？」

さらに友人が言葉を続けようとした時、始業のチャイムが鳴り、英語の教師が教室に入ってきた。  
「あーあ、良いところだったのになあ。続きはまたあとで聞かせてね！」

そう言って前を向いて座り直す友人の後ろで、彼女はシーバスに乗った時のことを思い出し微笑んでいた。

2月14日の午前7時15分。玄関を出ると、いつものように彼がやってきた。  
おはようの挨拶を交わし、二人並んで地下鉄の駅に向かう。

途中で、彼女は小さな手提げ袋の中からきれいにラッピングされたチョコレートを彼に渡す。  
礼を言う彼が嬉しそうに微笑むのに合わせ、彼女の顔にも笑みがこぼれる。

さらに彼女は手提げ袋から何か取出して彼に差し出す。

毛糸で編んだ手袋だ。彼女は午前2時迄かかってやっと作り終えた。

「マフラーにしようかと思ったんだけど、制服の上からだと邪魔かなと思って手袋にしたの」

そう言う彼女の前で、彼は早速その手袋をはめてみる。

「ぴったりだ。とても暖かい」

そう言って彼は彼女の手を取り、再び歩き始める。  
二人の手の間にはそれぞれの手袋があるのだけれど、手袋越しでも互いの暖かさが伝わってくるように思えた。

3度目に二人で飲みに行った時、彼女が提案した。  
「小学校5,6年生の時のクラス会をやらない？」  
彼ももちろん賛成し、週末に会場を探しに行くことにした。

日曜日の夕方、まだ夕食には少し早い時間に、伊勢佐木町2丁目から少し路地を入った所にある中華料理店に二人で行った。恐らく20人くらいは集まるだろうと想定し、空いている日を教えてもらった。料理は予算に応じていろいろ調整してくれるそうなので、仮の予約を入れさせてもらうことにした。

氏名と電話番号を尋ねられたので、彼が答えた。店の人は「一応念のため」と言って彼女にも聞いた。  
その時、彼女は姓は言わずに名前だけを答え、彼の方を見て微笑んだ。

その笑顔を見ながら「彼女にはかなわないや」と彼は心の中で思った。

私鉄とJRとを結ぶ地下街にある喫茶店の、通りに面した窓際に二人は向かい合って座っている。  
彼の前にはコーヒー、彼女の前にはクリームソーダが置いてある。

向かい合っているとはいうものの、彼も彼女も視線はテーブルの上だ。互いのことを見ていない。  
無言のまま数分が過ぎ、彼が小さな声で「じゃあ、バイバイ」と言って伝票を手に立ち上がる。  
彼女は小さく頷くが、顔をあげない。

レジで支払を済ませ店を出て、私鉄の駅に向かう彼を視線の隅に捕らえつつも、彼女はまだじっと座って動かない。

クリームソーダのグラスについた水滴が流れ落ちるのと合わせるように、彼女の頬に涙がこぼれた。

午前中ずっと会議が続き、暗い会議室に飽き飽きした彼は、暖かい日射しに誘われてオフィスから出てきた。

コンビニでおにぎり2つとお茶を買って公園に向かい、座れるところを探した。芝生広場を取り囲むようにある歩道に沿って木製のベンチが20mおきくらいに並んでいる。日射しを正面から受けるベンチの右端に彼は座り、おにぎりの昼食をとった。

1つ目を半分くらい食べ終えた時、彼から見て左側の歩道を彼女が歩い

てきた。グレーのスーツに身を包み、歩き方がとても綺麗だ。ファッションモデルのような嫌みのある歩き方ではない。足先をまっすぐ前に向け、ずっと前に出すだけなのだが、細い足首とふくらはぎのバランスの絶妙さと相まって、彼の視線を釘付けにした。

彼の座っているベンチに近付くと、彼女はふいに歩みを止めた。

足から視線を上にあげた彼と、彼女の目が合った。

「こちらに座っても良いかしら？」

彼女が尋ねたので、かれは左手でベンチを示しそれに答えた。

ベンチの左端に座り足を組んだ彼女は、バッグから小さな手帳を取出し、ひとしきり何か書き込んでいた。ページを前後にめくり何かを確認している彼女の様子を視線の端に捕らえつつ、彼は2つ目のおにぎりを食べた。おにぎりを食べ終えてお茶を飲み、両手を上に持っていき伸びをする彼に合わせるように、彼女は手帳をバッグにしまい立ち上がった。彼の目を見て軽く会釈すると、彼女は歩道を右に向けて歩き出した。

彼の正面を通る瞬間、彼女の眼鏡のフレームがキラリと光った。

高台に登る坂道の途中にある公園に二人はいた。

その公園は二人がそれぞれ通っている高校のちょうど中間にある。3月中旬の暖かい日の夕方、学校が終わってから待ち合わせをし、坂道を登ってきた。

公園には二人以外に誰もいない。ブランコに乗りながら、期末試験を終

えて春休みを待つばかりの二人は楽しそうに話をした。ひとしきり話をしたあとブランコを止め、彼はバッグの中から包みを取り出し彼女に手渡した。

きれいにラッピングされたクッキーだった。

さっそく開けて食べてみたいと彼女が言い、包みを開いた。美味しそうに食べる彼女の笑顔を見て、彼は幸せな気持ちになった。あんまり美味しそうに食べるので、彼も食べてみたくなった。

「私の食べる分が減っちゃうから、ひとつだけよ」

と彼女が差し出す袋から、ちゃっかり二つもらって食べた彼からも笑顔がこぼれた。

二人の目の前にはきれいな夕焼けが広がっていた。

飛んでみようか？

50m程先の交差点の信号が青に変わった時、彼はそう言って一段ギアを落とし、アクセルを床まで踏み込んだ。

片側2車線の道を北に向かう彼の車は、その交差点に向かって猛然と加速した。東西に延びる道は中央がゆるやかに盛り上がっている。この交差点を時速80kmを超えて通過すると、ジャンプすることができる。この道をよく通る彼は時々楽しんでいるのだが、隣に座っている彼女にとっては初めてのことだ。

「シートに深く座って、どこかに掴まっいて」

彼がそう言った次の瞬間、車は宙に飛び出した。

「きゃっ！」

思わず声を出した彼女の方を気にしながらも前を見続ける彼は、

「着地の衝撃はもっと凄いぞ」  
と心の中で思った。

ジャンプしている彼の車を、満月が照らし出していた。

雨の予報が出ていたのに、傘を持ってくるのを忘れていた。

4月下旬の火曜日、地下鉄の駅の階段を上ってきた彼女は、かなりひどい降りになっている雨を見て立ちつくした。ここからJRの駅までの100m程の間、屋根が無い所を歩かなければならない。今日は体育の授業が無いので、制服が濡れてしまうと着替えが無い。駅の改札口わきにあったKIOSKに傘は売っていただろうかと思い、今上ってきたばかりの階段を振り返ると、彼と目が合った。

上から見下ろした時はそれほど背が高く無いかと思ったが、横まで来ると彼女の頭が彼の学生服の肩までしか無かった。彼は雨と彼女とを2-3度交互に見たあと自分の傘を無言で差し出すと、鞆を頭の上にかかげ、雨の中を駆け出して行った。

傘を広げ彼女は歩き始めた。緑色を基調としたチェックの傘。自分の傘よりひと回り大きいかなと思いつつ、JRの駅へと向かった。

改札口を抜け階段を上りホームに出た。この傘を貸してくれた彼がいるかと思い見渡したが、どちら側のホームにも見つけられなかった。いつもこの時間に通っているのに、彼に会ったのは初めてだ。普通の詰め襟

の制服だったので、どこの高校なのかも良く分からない。

今日1日はこの傘を借りて過ごすことになるけれど、いったいいつ返すことができるだろう？ 彼はきっとずぶ濡れになってしまったらうから、授業中たいへんだらうな。お礼をしなくちゃいけないな。

ぼんやりそう考えている彼女が立つホームに、水色の電車が滑り込んで来た。

国道から100mほど離れて並行している田んぼの中の一本道を、彼女が乗る自転車が学校に向けて進んでいる。

いつもは学生達で混んでいる道だが、朝寝坊して家を出るのが遅くなってしまった彼女の前には誰もいない。あと1km位で学校に着く。遅刻になるかどうかギリギリの時間だ。

ふいに後ろで自転車のベルが鳴った。振り返る彼女に「おはよう」と彼が声をかけた。彼女も「おはよう」と言うと、彼は「遅刻になるぞ」と言って彼女を追い越していった。遅刻常習犯の彼より遅いということは遅刻確定になってしまう。

「待って」と彼女が言うと、彼は振り返って「嫌だよ」と笑い、そのままのペースで進んでいった。「冷たいなあ」と彼女も笑いながら、立ちこぎで彼に追い付こうと両足に力を込めた。

4月7日の朝、彼女はバスに乗り込んだ。

前日は入学式だったので母親と二人で行った。中学までは自転車で通学していたので、定期を買ってバスで通うは初めてだ。バスの中央からや



や後ろの左側、一人掛けの席に座った。同じバス停から乗ったのは数人の会社員だけ。学生は彼女一人だった。

それから3つ目のバス停で、彼が乗って来た。整った顔だちをして、身長は175cm位あるだろうか。彼はバスの中をぐるりと見渡したあと、彼女のすぐ前の席に座った。座る直前、彼の詰め襟の制服の左側に、彼女と同じ高校の校章があるのを見つけた。なんだか嬉しくなってしまった彼女は、笑みがこぼれるのを隠すように、窓の外に顔を向けた。

「あっ！噴水がある！」

そう言うと、彼女は小走りで噴水に近付いていった。

4月になって初めての日曜日。彼の高校や彼女の高校にある桜が満開になっていたの、天気良くなった今日、二人は川の近くにある公園までお花見に出かけた。

公園の桜もきれいに咲いていた。しかし、桜の下にはビニールシートを広げ、酒盛りをしている人たちがいて、あまり近くまで行って見る雰囲気ではなかった。

遠巻きに桜を眺めながら、二人で公園内を歩いていると、子供向けの遊具のある一角を曲がった先に噴水があった。

先に手すりの脇まで行って、噴水を見上げている彼女の傍らに並んだ彼が「ずいぶん高くまで上がるんだね」と言うと、彼女は「ホント、5mくらいあるのかなあ？」と彼に問い返した。

彼は返事をする代わりに自分の左手を彼女の右手に重ねると、彼女が「ほら、あそこに虹が見える」と左手で噴水の下の方を指差した。笑顔で小さな虹を見つめる二人の周りでは、時間がゆっくりと流れていた。

カーステレオから流れる音楽が3回変わっても、車は全く動かない。ひどい渋滞だ。

助手席に座っている彼女は運転席の彼をまっすぐに見て、何か一言告げた。彼女の方を向いていた彼が視線を前に戻した時、彼女は助手席のドアを開け、外に出た。

白いブラウスに短いスカートの彼女は、渋滞している車の間を縫って舗道に近付いた。車の進行方向と同じ向きに歩きながら、車道との境にあるパイプ製のガードレールを見た。この先しばらくは途切れること無く続いていることを確認すると、少しだけ歩調を早め、左手を支柱について両足を前に振り上げ、ガードレールを飛び越えた。

さっきまでと同じペースで舗道を歩き続ける彼女の長い髪が、春の風で揺れていた。

21時を過ぎて十数分経った時、彼女の携帯が鳴った。彼からの電話だ。

「そう、残念ね」とだけ答えて電話を切り、彼女は2杯目の水割りを飲んだ。

ウェイティングバーには彼女一人しかいない。

バーテンがグラスをきれいに磨いては並べていく仕草を見ながら、もう1杯だけ飲んだら店を出ようと彼女は思った。



店を出ようとスツールを降りてレジに向かう途中、ふと見上げると陶器製のビアジョッキが並んでいた。

以前、彼と二人でニュルンベルグを訪れた時に立ち寄った店が出てきた物が、この形によく似ていた。もう一度行ってみたいけれど、当分は都合がつきそうに無い。

今度この店に来た時は、あのジョッキでドイツのビールを飲もうと彼女は心に決め、重い扉を開いて外に出た。



バス停のアナウンスで目がさめた。頭の中がまだぼんやりしている。数秒経ってから、乗り過ごしてしまったことによりやく気がついて、慌てて停車ボタンを押した。

バスを降りるとすぐに彼女は小走りに走り出した。左手の時計を見ると6時10分。まだコンサートの開場時間には充分間に合う。信号で止められて1つ向こうのブロックを見ると、バス停のそばに彼が立っていた。反対側を向いて、次に来るバスを気にしている。

歩道の一番お店寄りの端を選んでそっと近付いていけば、彼に気が付かれずにすぐそばまで行けるかもしれない。そう思った彼女は、人込みに紛れ、そっと彼の背後から近付いていった。

不安げな表情で待っている彼の背中を叩こうと右手を上げた彼女は、とても良い笑顔をしていた。

「うわぁとってもきれい」

そう言うと、彼女は道端の小さな花に向けてかがみこんだ。

5月の連休の最終日、二人はハイキングに出かけた。国道から海のすぐそばの公園迄、小川に沿って遊歩道が続いている。バスから降りた二人は手を繋いで歩き始めた。長そでを着ていると暑いぐらいの良い天気だ。帽子をかぶってきて正解だったなと思いながら、彼女は目の前の小さな花を楽しんだ。日頃そんなふうに見る事の無い彼も、彼女の傍らに腰を落とし、じっとその花を見つめた。

程なく二人は歩き始めた。小川の向こう岸には釣り糸を垂れている老人が二人。二人とも麦わら帽子をかぶっている。「何が釣れるんだろう？」と言う彼に、「魚のことは全然わかんないの」と笑って答える彼女。

二人が歩く遊歩道の上を覆っていた木々の枝が無くなると、ぱっと視界が開け、大きな風車が見えた。

「おっ、凄い風車がある」と驚く彼に、「あそこまで、ヨーイドン！」と言うと彼女は走り出した。

右手で帽子を押さえ、彼の足音を後ろに聞きつつ走りながら、早起きして作ったバッグの中のおにぎりの角が潰れて真ん丸になっちゃうかなあと、彼女はふと思った。

「外で食べるか」

そう言うと、彼はチーズバーガーと照焼きバーガー、ポテトとコーヒーの乗ったトレイを持って扉を開き店の外に出た。一緒に来た二人の友人がそれに続いた。

店の前にある丸いテーブルに三人で陣取り、わいわい騒ぎながら少しだけ遅めの昼食だ。ハンバーガーを二つ食べ終え、彼はポテトをつまみながらコーヒーを飲んでいた。

店内から彼等と向かい合う位置にはカウンター席が並んでいる。右斜前に目を向けた彼は一瞬驚いた顔になり、すぐに笑顔になった。そこに座っていた彼女もほぼ同時に彼に気が付いた。互いに右手を上げ笑顔の挨拶を交わす。彼女は今日もとびきりの笑顔だ。

彼の向いに座っていた二人がそれに気付いて、店の方を振り返った。その動作に合わせてるように、彼女の笑顔は少しだけよそ行きになった。

バス停でバスが来るのを待っている彼は、制服の左ポケットから携帯を取り出した。

携帯を開いてみると、メールが一通届いていた。メールの送信時刻は零時1分。

中学で同級生だった女の子からのメールだ。メッセージはとても短い。

1行目の9文字を読んだ彼の顔が笑顔に変わった。  
2行目には「誰よりも先にこれを言いたくて」とあった。

右から近付いてくるバスに気がつき、携帯を閉じてポケットにしまいながら、彼は空を仰いだ。5月中旬の空は、きれいに晴れ渡っている。ドアが開いて乗り込みいつもの席に座った彼は、窓の外を見ながら「なんて返事を書こうかなあ」とぼんやり考えた。

彼は今日16才になった。

肩を叩かれ「着いたよ」という声に、彼は目が覚めた。

バスは学校の前のバス停に到着している。半ば寝ぼけたまま、ずり落ちそうになるエナメルバッグを抱えて彼はゆっくりと立ち上がる。バスの中は学生達でいっぱいだ。

立ち上がって降りる人の列についてみたものの、声の主らしき女の子が見当たらない。彼の前には男子生徒が何人もいる。バスを降りると、皆から少し離れたベンチの脇に、彼女がこちらを見て立っていた。まだぼんやりした頭のなかで、彼女はバスの中で彼のすぐうしろの席によく座っている子だということに気がついた。

彼の表情が明るくなるのに合わせて、彼女の顔にも笑顔があふれた。

曲がりくねった坂道を、空冷4サイクル単気筒SOHC2バルブ399ccのバイクが登ってきた。

頂上にある建物の前にバイクを止め、右足を後ろに振り上げて、彼女はバイクを降りた。ガソリタンクからバッグをはずした彼女は建物の中に入り、階段を降りた。ここにある湖を見渡せる風呂が大好きな彼女は、数カ月に一度くらいここを訪れる。今日も天気が良い。

青空と湖そして風呂を存分に楽しんだ彼女は、階段を登り、ラウンジでコーヒーを飲んだ。彼女の席からは自分のバイクが見える。まだ少し残っているコーヒーカップをテーブルに置いた時、向こう側からバイクが近付いてくるのが見えた。彼女と同じタイプのバイクだ。

彼女のバイクの向こう側に並べて止まると、ライダーはステップの上へ一度立ち上がったあと、弾みをつけるようにバイクを降り、ヘルメットをとって彼女のバイクと自分のバイクを比べるように眺めていた。

真っ赤なタンクの自分のバイクの向こうにある黒いタンクのバイクと、その向こうにいる彼の表情を楽しみながら、彼女は最後の一口を飲んだ。

なんて書いてあるの？

ふいに声がしたので振り返ると、左肩にかけたショルダーバッグに右手を添え、体をくの字に折り曲げた女の子がいた。

峠道の途中にある道の駅の駐車場。長距離を走ってきて疲れた彼は、車のすぐ左側にある歩道に腰をおろし、先日買ったばかりのホイールを見ていた。

「ブレンボって読むんだ。イタリアのメーカーだよ」

「金色に赤の配色がとってもきれい」

そうって微笑んだ彼女を見上げる彼の額に、大きな雨粒がひとつ落ちてきた。

「うわぁ！とっても気持ち良いよ！」

木陰にバスケットを置いた彼女は、ビーチサンダルを履いたまま川の中に入って行き、大きな声でそう言った。

梅雨の間の晴れ間、二人はバスに揺られて山沿いに流れる川までハイキングに来た。去年の夏に友人達と来て泳いだ川だ。さすがに泳ぐにはまだ早いけど、川遊びくらいはできると思い彼女を誘った。

「冷たいかい？」

そう言いながらそっと足を水に入れる彼に向かって、彼女が水しぶきをかけた。

「うわぁ！」

ふいを突かれて驚いた彼が顔をあげると、水しぶきの向こうの彼女はまるで悪戯っ子のような笑顔を浮かべてこう言った。

「向こう岸まで渡ってお弁当を食べようよ」

それに応える代わりに、彼は彼女に手を差し伸べた。

「よぉ、7月1日から高校生3人以上で映画を見に行くって一人千円だって知ってた？」

改札口に続く階段を降りながら、同級生の友人が言った。

「へえ、いいね！」

「でも、お前と彼女の二人じゃ安くないから、俺もつきあってやるよ」

嬉しいような嬉しく無いような複雑な表情をした彼は、なんだか御機嫌な友人と並んで階段を降りていった。

「ほら、お待ちかねだぜ」

改札口を出た向こう側、柱のそばに彼女は立っていた。二人に気がつき顔の横で手を振った。

「何すましてるんだよ、手を振らないのか？　じゃあ俺が...」

と言うと友人は改札口を出ながら大きく手を振り始めた。それを見て笑顔になった彼女の側まで来ると、

「今度映画に行こうってこいつが言ってるよ。気が小さくて二人じゃ緊張するって言うから、俺もつきあうことにした」

勝手なことを言い始めた友人に軽くキックをお見舞いしたが、友人はさらに続けてこう言った。

「俺達二人で両側を固めてやるから、暗いところでも絶対安心！」

「何言ってるんだ、そう言うお前が一番危ない」

「そんなこと無いよぉ、ねえ？」

首をかしげながら笑っている彼女を挟み、3人並んで彼等は横断歩道を渡り始めた。

自転車に乗って街へ向かっている途中、脇道から突然飛び出してきた女の子とぶつかりそうになり、急ブレーキをかけた。

「ごめんなさい、大丈夫だった？」

声に聞き覚えがあったので、良く見てみると中学の時の同級生だった。

「よぉ、久しぶり。何をそんなに急いでるんだよ？」

「電車に乗り遅れちゃいそうなの。そうだ、駅まで乗せてってくれない？」

そう言い終わる頃には、彼女はもう彼の自転車の後ろに回っていた。バッグを肩にかけ、後輪の車軸の所に付けてある金具に立ち上がり、彼の肩に掴まりながら彼女は言った。

「運転手さん、駅までダッシュをお願いします」

「お客さん、ダッシュだと追加料金になりますけどよろしいですね？」  
彼はそう言うとカーブ右足のペダルからこぎ出した。加速に驚いた彼女が掴まっている手に力を込めた。

「うわぁ、凄く速いねぇ！」

「お客さんの体重がもっと軽ければ60km/h位は出るんですけどねぇ」  
そう言った彼の頭に彼女がげんこつをお見舞いすると、彼は大袈裟に蛇行して、

「あばれないでしっかり掴まっていますよ！」

と言い、さらに真面目な口調になって続けた。

「今日はデートかよ？」

「そうなの、初デートなのに遅れちゃいそうなの」

嬉しそうに言う彼女の言葉を聞くと、彼は無口になってしまった。

駅前に着くと、彼女は自転車から飛び下りた。

「まだ3分前だ。ありがとう、助かった」

「どういたしまして」

と言って、すぐに戻ろうとする彼を彼女が呼び止めた。

「さっきデートって言ったのは嘘。女の子と待ち合わせてるだけ。夕方家に戻ったら電話するね」

振り返りながらそれを聞いていた彼は、小さくうなずいた。

改札口に入る彼女と自転車で駅から遠ざかる彼。二人の顔には微笑みが浮かんでいた。

「すごくきれい」

空を見上げてそう呟く彼女の隣で、彼も息を飲んだ。

毎年8月第1週目の土曜日に河原で行われる花火大会に、二人は来ていた。

何十発も連続して打ち上げられた花火のあと、彼は彼女の方を向いて自分の心の内を伝えた。その途中でまた花火があがった。彼女は彼に「今なんて言ったの？」と尋ねた。もう一度繰り返す彼の言葉を、彼女はじっと彼の目を見つめながら聞いていた。それを聞き終わると、彼女はちょっと悪戯っ子のような笑顔を浮かべ、「ホントはさっきも聞こえていたんだけど、せっかくだから、もう一回言ってもらおうと思って...」と言った。そして彼女は足下を見つめながら自分の気持ちを彼に告げた。

その言葉をきっかけに、彼は彼女の手をとった。二人とも少し照れたような笑顔になった。

そんな二人を祝福するかのようになり、また花火が連続して打ち上げられた。とりわけ大きな花火が轟音を立てて弾けた時、彼は彼女を見た。朝顔の模様の浴衣と彼女の横顔が、いろいろな色に染まって見えた。

「ありがとう、とっても嬉しい」

彼の目を正面から見ながらそう言うと、彼女は包みを開け、手のひらにおさまる程の大きさのデジカメを取り出した。色はインディゴブルー。細かく凹凸がつけられた表面にオープンカフェの照明が反射して、美しく輝いている。

彼女のリクエストに応じて、彼からの誕生日プレゼントだ。

ひとしきりカメラを眺めたあと、彼女は「もう1つだけお願いがあるの」と言った。

「次の日曜日に、あなたのオープンカーで私をドライブに連れて行って欲しいの」

助手席からの景色をカメラに収めつつ、お気に入りのコースを1日かけて走りたいのだと言う。彼が了解すると、彼女は小さなカメラを包み込んだ両手を胸の前に持ってきて空を見上げ、嬉しそうに微笑んだ。

目線の先に明るく輝く満月を見つけた彼女は、初めて撮る被写体としてこれ以上のものは無いと思い、カメラのスイッチを入れ、シャッターを押した。

21時の時報を待って、彼女は電話をかけた。

2度目の呼び出し音が始まると同時くらいに受話器が上がった。電話に出たのは彼の母親だ。母親同士仲が良かったので、彼女のことよく知っている。久しぶりと互いに挨拶を交わした後、彼を呼んでくれた。「今日はどうもありがとう、遅れそうだったのですごく助かった」そう言った後、彼と電話で話すのはひょっとしたら初めてかもしれない...と彼女は思った。この電話番号も中学の卒業生名簿から探し出したものだ。

面と向かって話すときは次々とギャグを織り交ぜながら軽妙な語り口に

なる彼だが、電話口の彼は、まるで別人のように言葉少なだ。駅前で別れた時「夕方電話する」と言ったのに遅くなってしまったことを彼女は詫びた。

「うん、そう、とっても楽しかったの。夕方には帰るつもりだったのだけれど、話が弾んで、気がついたら7時を回っていて、また駅まで走っちゃった」

それを聞くと、彼も電話の向こうで笑っていた。

「あのねえ、お願いがあるの」

ちょっと唐突かなあと思ったけれど、彼女は思いきって続けた。

「もし良かったら今度私とデートしてくれない？」

ちょっとだけ間を置いてから、彼は了承してくれた。

「うん、ありがとう。じゃあ、今度の日曜日の9時に駅前で。絶対に忘れちゃダメだよ。うん、それじゃお休み」

電話を終え受話器をクレードルに戻した彼女は、自分の机の上に目をやった。

写真立ての中では、まだ小学生の彼と彼女が手をつなぎ、とても嬉しそうに笑っていた。

「うわあ！こんなに沢山あってとっても素敵」

赤レンガ倉庫をぐるりと巡っているうちに、彼女が天井を見上げて言った。彼女の声にも彼も天井を見上げ、目を細めて微笑んだ。

「こんな灯りが似合う家に住んでみたいなあ」と彼女が言うのを聞いて、「ダメだ、どんな家だと似合うのか想像もつかないや」と彼が笑って応えた。

それでもしばらくの間、二人は手を繋いだまま灯りを見つめていた。

8月第1週によく晴れた日、二人は電車に乗って海に出かけた。

50m位沖にある浮島まで二人並んで泳ぎ、縄梯子で上にあがった。地元の小学生たちが代わる代わる飛び込んでいる。まっすぐ飛び込む子もいれば、宙返りをしながら飛び込む子、空中でおどけたポーズを作る子など、それだけ見ているだけでも飽きないほどだ。彼と彼女もそんな小学生に交じって順番に飛び込んだ。

しばらくすると、小学生たちは全員で手を繋ぎ一斉に飛び込んだ後、岸まで戻って行った。

浮島の上に残された彼と彼女は顔を見合わせ、岸から一番遠い端まで行って手を繋いだ。「ヨーイドン！」彼女の声をきっかけに浮き島の上を全力で走り、手を繋いだまま頭から飛び込んだ。海の中で互いを引き寄せた二人は、同時に海面に顔を出した。あまりに彼女の顔と近づいてしまったためか、彼はのけぞるよう後ろに倒れ込み、背泳ぎの体勢で空を見上げた。彼女も彼の傍らで仰向けになり、並んで空を見上げた。

青く晴れ渡った空には、夏の雲が一つだけぽっかりと浮かんでいた。

「こら、遅刻だぞ！」

約束の9時を少し回った頃、彼が駅に着いた。

「ごめんごめん、寝坊しちゃった」

「じゃあバツとして、今日は荷物係ね」

そう言うと彼女は、両手で前に持っていたバッグを差し出した。中には、彼女が早起きして作ったお弁当が入っている。そのバッグを左肩にかけながら、

「今日はどこに行くの？」

と、デートの約束をしたものの、どこに行くか聞いていなかった彼が尋ねた。

「まだ秘密。ミステリーツアーだと思って」

彼女は笑いながらそう答え、いくらの切符を買えば良いかだけ教えてくれた。

改札を抜け、ホームで電車を待つ二人の間は微妙な距離だ。

「ねえ、もう一つ遅刻したバツを追加しても良い？」

彼の方に一歩近づき、彼の目をまっすぐに見ながら彼女が言った。

「デートなんだから、一日中私と手をつなぐこと！」

彼女にそう言われ、彼は笑いながら彼女の手をとった。

嬉しそうに微笑む彼女と彼が立つホームに、グリーンとオレンジの2色に塗り分けられた電車が滑り込んできた。

金曜日の早朝、徹夜明けで返ってきた彼は、玄関を入った時にふと軽い違和感を覚えた。

何がおかしいのか分からないまま居間に進み、机の上にある本に目をやった。

表紙の裏に淡いピンク色の便せんが挟んであるのを見つけ、本を開いて取り出し、窓際のソファに座って読み始めた。

同居している彼女からの置き手紙だ。



ブルーブラックのインクで綴られた文章を最後まで読んだ彼は、実に彼女らしいと思わず微笑んだあと、すぐに眠りに落ちた。

彼の右手から床に落ちた便せんの最後の行には、「一年後の今日戻ります。探さないでください」とあった。

横浜駅で水色の電車に乗り換え20分ほど南下した駅で、さらにもう一度乗り換えた。

「どこに行くのか分かってきたような気がする」  
笑いながらそう言う彼に、彼女はこう続けた。  
「さすがにもう分かっちゃたか。今日は一日楽しもうね」

目的地のすぐ目の前の駅で降りた二人は、並んで階段を下り始めた。二人とも笑顔だ。

少し早足になって、彼女の半歩前を歩いている彼に向けて彼女が言った。

「こら、一日中手を繋ぐ約束でしょ！」

それまでずっと繋いでいた手を、改札を出た時から離してしまっていたことに彼女が気づいた。

「ごめんごめん」

と言いながら半ば振り返りながら手を差し出す彼の手を、彼女は握りしめた。

駅を出て歩いていると、彼女が切り出した。

「私とつきあってくれない？」

突然そう言われ、彼は驚いた表情で彼女の方を見つめた。

「突然告白するなよ」

「ちっとも突然じゃないよ。つきあってくれるのくれないの、どっちなの？」

首を少しかしげながら、ちょっと考えたあと彼が言った。

「いいよ、つきあおう」

彼の言葉を聞くと、彼女は息を吸い込みながら空を仰ぎ見た。

「よかった、OKしてもらえて」

「でも突然でびっくりした」

そう言う彼に、彼女は続けた。

「小学校3年生の時一緒のクラスだったでしょ？ 春の遠足に出かけたとき、私転んで泣いちゃったんだよね。覚えてる？」

「ああ、そう言えばそんなこともあったような気がする…」

「あの時とっても痛くてずっと泣いてたら、あなたが近くに来て慰めてくれたんだよね。それでもまだしばらく泣いてたら、『俺のお嫁さんにしてあげるから、もう泣くな！』って言ったんだよ。さすがにびっくりしてすぐ泣き止んだら、ニコニコしながら頭をなでてくれたんだよ」

「そうだったか？」

「そう。そのあと先生が来て、二人並んで手を繋いでる所の写真を撮ってくれたの。その写真は今でも私の机の上に飾ってあるの」

「そうだったのか」

「うん、だから私にとってはちっとも突然のことじゃないんだよ。突然どこるか、7年越しの思いがやっと告白できたの。あの時のあなたの言葉へのお返し」

さらに彼女は続けた。

「小学校の高学年や中学生になったら、あんまり話さなくなっちゃったけど、毎朝写真の中のあなたに『おはよう』って言ってたんだ。高校が別になっちゃったから、ちっとも会えなくて寂しいなあと思ってたら、このあいだ自転車とぶつかりそうになったでしょ。ほんとにビックリしたんだけど、ありったけの勇気を振り絞って、今日のデートに誘ったの。今朝お弁当を作りながら、『今日告白しないと後悔しそう』って思い始めて、それで、思いきって告白しちゃいました」

そこまで一気に言うと、彼女は満面の笑みを浮かべ、彼の目を見つめた。

それに答えるように、彼は繋いでいる手に力を込めた。

## クリスマスイブの日

お昼ちょっと過ぎに、彼女はJRと私鉄が乗り入れる大きな駅に着いた。

駅前の広場に出て彼の姿を探したが見当たらなかったの、植え込みを囲むように並んでいるベンチの一つに腰を下ろして彼を待った。ベンチはかなり冷たくなっていたので、彼女は浅く座り直し両足を前に伸ばした。

昨夜の電話で、きちんと時刻を指定せずに「お昼」とだけ約束したことを彼女は思い出した。彼はすぐに来ないかもしれないなと思いながら、両手を息で暖め、駅前の道路を行き交う人々をぼんやりと見ていた。

10分程そうしていると、改札を抜け、こちらに向かってくる彼の姿が見えた。手を振る彼女を見つけると、彼は小走りに彼女に近づいた。遅くなったことを詫げる彼に、彼女は少しほおを膨らませ怒ったふりをした

が、彼に手を引かれて立ち上がる時にはもう笑顔だった。

どこで昼食を食べるか相談し、二人は歩き出した。交差点で信号待ちをしている時、彼は向かいのビルの壁にある時計に気がついた。信号が青に変わり歩き出してから、彼はその時計を指差して彼女に何か言った。それを聞いた彼女は笑顔で答え、コートのポケットに入れていた手を出して、彼と手を繋いだ。

その時計は12時24分を示していた。

校門を出て、彼は緩やかな坂を下ってきた。大きな通りまで出てバス停の時刻表を見ると、次のバスまでまだ10分以上あったので、彼は右手の交差点を渡りコンビニに入った。

いつものチョコバーを買おうと陳列棚を探したが、ちょうど売り切れてしまっているようだった。代わりに何か腹の足しになるものは無いかとその陳列棚を時計回りに回ると、パンの棚の前で両手に一つずつパンを持ってどちらにしようか悩んでいる彼女がいた。近づいていく彼に気がつかない彼女のすぐ横まで来て、彼は「左手に持っているやつの方が美味しい」と言った。

「うわぁ、驚いた。ちっとも気がつかなかった」と彼女は笑った。「私も左のにしようかと傾いていたところなの」と彼に言い、右手に持っていたパンを棚に戻した。

「ここで会うなんて珍しいな。部活の帰り？」と言う彼に彼女は頷き、二人並んでレジに向かった。彼女はレジの横にあるケースから温かいお茶を取り出し、それも一緒に買った。

「俺は肉まんにしよう」

二人でコンビニを出てバス停まで戻り、ベンチに座ってパンと肉まんを食べ始めた。

3口ほど肉まんを食べたところで、彼女がじっとこちらを見ているのに気がついた。

「たべる？」と彼がいうと、彼女は「うん。だってとっても美味しそうなんだもん」と笑った。

「じゃあ温かいお茶と交換ね」

彼は「一口だけだぞ」と言ってから、受け取ったお茶を飲んだ。

大きな口を開けて肉まんを食べ「うん、美味しい」と言うと、彼女はさらにもう一口食べた。

「あ、ずるい」と言う彼に「さっきの一口は交換したお茶の分」と彼女が言った。

「じゃあ今度の一口は？」と彼が問うと「間接キスの分」と答え、彼の目を見てにっこり笑った。

ショッピングセンターの屋上駐車場に出るドアが開き、右手にコーヒーが入った紙コップを持った彼女が出てきた。

左手に折れて自分の車まで真直ぐに歩き、右のドアを開け乗り込んだ。センターコンソールにあるカップホルダーにコーヒーを置き、運転席の窓を全開にした。

まだ寒い季節の休日の午後、彼女は待ち合わせの場所に15分程早く着いた。昼食後のコーヒーを飲まなかったことを思い出した彼女は、ショッピングセンターに入りコーヒーの専門店を探し出してテイクアウト

のコーヒーを買い、自分の車まで戻ってきた。

4.2リッターV8のエンジンを抱えるボンネットの先端には、丸形のヘッドライトが4つ独立に並んでいる。この車の運転席に収まっている時が一番落ち着く時間なのかもしれないと思いながら、彼女はコーヒーを飲んだ。

ほどなく、屋上駐車場に出るスロープを上ってくる車が見えた。この車が自分の車の後ろに付いた時、バックミラーに映るのだろうかと考えてしまう程車高が低い。同じV8だが3.5リッターのエンジンをミッドシップに持つこの車は2基のターボで加給されている。

駐車場に止まっている彼女の車を見つけ、その車は一度前を通り過ぎてからバックで右隣に並んで止まった。左のウインドーが下がると、サングラスをした彼が一枚の紙を差し出した。2枚のドア越しに無言でそれを受け取った彼女は、彼にコーヒーカップを渡した。カップを受け取り、一口飲んだ彼はカップに印刷された店名を確認するように眺めた。もう一口だけ飲んでから、彼はカップを彼女に返した。

数秒の間見つめ合った後、彼は左手を彼女に差し出した。少しだけ首を傾げながら、彼女も左手を出して握手をした。二人の手が離れるのを合図にしたかのように彼の車が発進し、一度だけブレーキランプを灯した後、スロープに消えていった。

こんな紙切れ一枚で二人の人生が変わってしまうのだろうか、まだ少し残っているコーヒーを飲みながら、彼女は考えた。

日曜日のお昼を少し過ぎた頃、二人はターミナル駅近くのファースト

フード店にいた。

向かい合って座る窓際の席で、会話を楽しみながら笑顔で食事をしている。二人共既にハンバーガーを食べてしまい、フライドポテトをつまみながらコーヒーを飲み、互いの冗談に声を上げて笑っていた。しばらくそうしているうちに映画の上映開始時間が迫ってきたので、二人は店を出ることにした。

「ごちそうさま」と彼女が言った時には彼は既に立ち上がり、トレーを持って返却場所に向かって歩き始めていた。彼女もすぐに立ち上がり彼の後を追ったが、何か違和感を感じていた。

返却場所のすぐ近くにフロア係の女性がいた。トレーを持って近づいて来る彼に「ありがとうございます」と言うと、彼からトレーを受け取った。彼は無言だった。彼のすぐ後ろを歩く彼女がその女性に「ごちそうさま」と言うと、笑顔が返ってきた。

さらに違和感が大きくなってきた彼女は、彼に続いて店の階段を下りながら、何故なのか考えていた。あと3段で階段が終わる頃、彼女はその理由が分かった。理由が分かってしまうと、どうにも我慢ができなくなってきた。彼に続いて店の自動ドアから出て少し歩いた所で、彼女は立ち止まった。

前を歩いていた彼は、彼女が立ち止まったことに気付き、振り返った。「私帰る」

彼女の言葉に驚いた彼は「どうしたんだ？」と尋ねた。

「私はどうもしていない。どうかしているのはあなた」

そう言われても何のことだかさっぱり分からず、無言でその場に立ちすくむ彼に彼女は続けた。

「挨拶はすべての基本よ」

益々訳が分からなくなり困った表情になった彼に向かって、彼女は「さようなら」

と言うと、彼をその場に残し、映画館と反対方向にある駅に向かって歩き始めた。

左脇に本を抱えて、彼女が廊下を歩いている。

休み中に何か読もうと放課後図書館に寄ってみたら、新しい本が入っていたので2冊借りてきた。

もう少しで教室の後ろの入り口にさしかかる頃、右目のふちがかゆくなったので、彼女は眼鏡の内側に人差し指を滑り込ませた。右目を閉じて目をこすりながら教室に入ろうとした時、飛び出してきた男子とぶつかった。

バランスを崩した彼女が伸ばした右手が眼鏡を跳ね飛ばした。尻餅をついた彼女の右手のすぐ横で、レンズの割れる音がした。彼の右足が眼鏡の左のつるの付け根を踏んでしまっていた。

「ごめん、大丈夫だった？」

と彼が差し出した手に引かれ、彼女はゆっくりと立ち上がる。

彼は年明けの席替えで彼女の斜め後ろの一番窓際になった。日頃あまり話をしたことはないけれど、休み時間になると友人達と楽しそうな笑い声をあげている。

「私は大丈夫。でも眼鏡が...」

そう言い終わる頃には、彼はフレームが歪んでしまった眼鏡と、いくつかに割れてしまったレンズをを拾い上げていた。

「本当にごめん。俺、弁償するよ」

「え、いいの？」

「ぶつかったのも踏んづけたのも俺だから。それに、今日はちょうどバイトの給料日だし」

「なんだか悪いみたい...」

「今からバイトなんで今日はダメだけど、明日眼鏡を買いにいこうか？都合はどう？」

「明日は本を読もうと思っていただけだから...でも、本当にいいの？」

「うん。朝 10 時に駅前で待ち合わせでどう？」

「わかった。明日の朝 10 時、駅前で」

「本当にごめんな。じゃあまた明日」

そう言うと、彼は廊下を走って行った。

自分の席に戻り、2冊の本と壊れた眼鏡をバッグにしまった彼女は、ふと窓の外を見た。

ちょうど校門を走り抜けて行く彼らしき姿を見つけ、彼女は思わず笑顔になった。

駅前の花壇の周りにあるパイプでできた手すりに腰を下ろし、彼は彼女を待っている。

午前 10 時の待ち合わせより 5 分ほど早く、彼はここに着いた。

両手を上着のポケットに突っ込み、駅から出てくる人の流れを見ても無く見ていた。

あと 5m 位の距離まで近づいて初めて、それが彼女であることに気がついた。見慣れた制服ではないうえに、いつもうしろで結んでいる髪を解いている。さらに眼鏡をしていないので、まるで別人のようだ。教室で、

いつも斜め前の席に座っている彼女はこんなに美人だったのかと、彼は改めて思いながら、近づいてくる彼女に手を振った。

彼女も彼に気付き、笑顔になって小走りに近づいた。

「おはよう。ちょっと遅れちゃってごめんね」

「おはよう。制服じゃないとなんだか感じが違うね」

「そうかなあ？ きっと眼鏡が無いからじゃない？ 今も手を振ってくれなければ、あなただって分からなかったかも」

「そんなに目が悪かったのか...」

「中学 1 年の夏くらいに、一気に悪くなっちゃったの。それからずっと眼鏡。本の読み過ぎだっみんなに言われた」

笑いながらそう言う彼女を見ていた彼は

「さて、出かけるか」

と言うと立ち上がり、彼女と並んで駅前通りに向かった。

二人は眼鏡屋に着くと店員に予算を告げ、いくつか候補を選んでもらった。彼女は次々に取り替えては鏡を覗き込んでいる。5 分程そうしているうちに、彼女は候補を二つに絞った。

「どっちが良いと思う？」

「今かけているやつの方が似合うよ」

「やっぱり？ 私もそう思ったけど、こっちの方がちょっと高いのよね。大丈夫？」

「全然 OK」

彼女はフレームを決めたことを店員に告げると、検眼室に入っていった。

彼は店内をぶらぶら歩き回り、サングラスをかけたりしながら時間をつぶした。

「今回は度が進んでなかったみたい」

検眼室から出てきた彼女は、なんだか嬉しそうに彼に言った。

1時間くらいでレンズの加工が終わるといので、二人は支払いを済ませたあと一旦店を出た。

「マクドナルドに行ってコーヒーでも飲もうか？」

そう言う彼に彼女は頷くと、

「こうしているとなんだかデートみたいだね」

と、ニコニコしながら彼の左腕につかまった。

「ねえ、こっちのお店でもいい？」

ミスタードーナツの店の前を通り過ぎようとした時、彼女が彼に尋ねた。

「ああ、いいよ。ちょうど腹も減ってきたし」

「じゃあここにしよう！」

二人でショーケースの中からドーナツを1つずつ選び、コーヒーとともに支払いを済ませ、トレーを持って一番奥の席に向かった。

「これも払ってもらっちゃっていいの？」

「元はと言えば俺が悪いんだから、今日の分は全部おごりだよ」

「でも、眼鏡ができる頃にはお昼になっちゃうよ」

「うっ... じゃあお昼は割り勘で」

二人で笑いながらひとしきり話したあと、彼がつぶやいた。

「今朝会ったとき、コンタクトを勧めようかと一瞬思ったんだけど、考え直したんだよね」

コーヒーを一口飲んでから、彼女は答えた。

「どうして？」

「眼鏡無しの君がとっても素敵だっていうことを皆が知ってしまうと、競争率が高くなりそうだから」

「え... それってひょっとして...」

彼は自分を落ち着かせるように、ゆっくりとコーヒーを飲んでから言った。

「そう。つきあってください」

彼がこんなに緊張しているのを見るのは初めてかもしれないと思いながら、彼の目をじっと見つめ、

「どうしようっかなあ...」

と、いたずらっ子のような笑みを浮かべて、彼女が言った。

「見たぞ！ 見たぞ！」

大きな声を上げながら、友人が教室に入って来た。

「何だよ急に、いったい何を見たんだ？」

友人は彼の隣の席に横向きに座ると、続けた。

「しらばっくれやがって！ お前だけはずっと仲間だと思っていたのに、このやろう！」

「だからいったい何のことだよ？」

「土曜日の11時頃、お前どこにいた？」

「土曜日か... 駅前通りにいたかな？」

「いたかなじゃねえよ。俺は見たんだよ、バスの中から。お前と髪の毛の長い女の子が、腕なんか組んで歩いているじゃねえか」

「あ... 見られたか」

彼はそう言うのにやっと笑った。

「にやけてるんじゃないよ。いったいあれは誰だよ？」

「バスから見えたんじゃないのか？」

「いや、髪の毛に隠れて顔がよく見えなかったんだ。でもあまり見たことがある気がしない」

斜め前の席の彼女と話していた女の子が、途中で話に加わって来た。

「なにになに、浮いた話？」

「おう、こいつに彼女ができたみたいなんだよ。土曜日にデートしてるのを目撃した」

「ふーん、おめでとう。で、相手は誰なの？」

「まだ教えない」

「何だよもったいぶりやがって」

友人がそう言ったとき、始業のチャイムが鳴った。

「あーあ、いいなあ。今度その彼女を紹介してくれよな。ついでに彼氏募集中の彼女の友だちも」

そう言いながら自分の席に戻る友人を笑顔で送ると、彼は目線を前に戻した。

英語の教師が教室に入って来たのを目で追うクラスメート達の中、斜め前の席から彼の方を振り向いていた彼女がにっこり微笑むのを、彼だけが見ていた。

「いつになったらお前の彼女を紹介してくれんるんだよ？」

金曜日の昼休みに、またあいつがやって来た。

「またお前か、なんだかくどいぞ。彼女じゃなくてその友人狙いなんじゃないのか？」

そう言われて言葉に詰まり、照れ笑いをしている友人の向こうから、

「何か新しい展開でもあったの？」

と、彼女の友達が声をあげた。

「いや、こいつが全然彼女を紹介してくれなくてさあ」

「でもお前の場合、動機が不純なんだよ」

そう言われて皆で笑ったあと、友人がぼそっとつぶやいた。

「お前は週末はデートかもしれないけど、俺なんか暇でさあ... 部活も休みだし」

「そうだ、明日から名画座で『ALWAYS 三丁目の夕日』をやるみたいなんだけど、観に行かないか？」

「あ、いいな。私も一緒に行ってもいい？」

「私も観たかったけど見逃してたから行きたいな」

珍しく彼女も会話に加わって来た。

「俺も行くよ。どうせ暇だし。でも、お前はいいのか？ 彼女と会わなくても？」

「全然大丈夫」

「そうかあ？ 実はすごく嫉妬深い娘で、映画館を出た所で鉢合わせして修羅場なんてごめんだぞ！」

その言葉にひとしきり笑ったあと、彼が言った。

「明日の1時に駅前で待ち合わせにしようか。みんな都合は大丈夫？」  
頷く3人の中で、彼女だけが意味深な笑みを浮かべているのに、他の二人は全く気がついていないようだった。

「じゃあ、それで決まり！」

「よっしゃ、何か元気が出て来た！」

そう言うあいつの言葉に、また皆が笑い声を上げた。

「よお、早いな」

彼が1時5分前に駅に着くと、既に彼女は花壇のそばに立っていた。  
「ちょうど良い時間のバスが無くてさあ、10分も前に着いちゃった」  
彼は彼女のすぐ隣まで来ると、手すりに腰を下ろした。

「それにしてもショックだよなあ。あいつに彼女ができるなんて」  
「あなたはどうかのよ、普段のあの元気の良さなら、彼女が居てもおかしくなさそうなのに」  
「時々そんなことを言われるんだけど、全然ダメ。気配すらない。それよりお前はどうか？」  
「私も今日来るあの娘も全くダメなのよね。男子達の見る目が無いんだって二人で慰め合ってたんだ」  
取り立てて美人ということは無いけれど、性格もスタイルも良いので、確かに一理あるなあと、改めて彼女を見ながら彼は考えた。

「あっ...あれ見て！」  
彼女の言葉に改札口の方を向くと、あいつが女の子と腕を組んでこちらに向かって来るのが見えた。  
「あの娘だよ、俺がこないだ見たのは。あの野郎彼女を連れてきやがった！」  
「あなた本当にちゃんと見てたの？ よく見てごらんよ、あの娘が誰だか」  
「俺はあんな髪の毛の長いかわいい娘なんて知らないぞ！」  
「もぉ、鈍いんだから！ 彼女が眼鏡をかけて髪をポニーテールにしたのを想像してみなさいよ！」  
「え？ ああああ...！」  
近づいて来る二人を指差しながら立ち上がる彼の仕草があまりにも面白かったので、皆笑顔になった。

「やあ」  
「やあじゃねえよこの野郎。しかしお前の彼女がクラスメートだなんて思ってもみなかった」  
「ホントよねえ。私にも黙っているなんて！」  
「ゴメンね、隠すつもりは無かったんだけど、何か言いそびれちゃって」  
「ま、そういうことで」  
「何がそういうことだよ。今日はいろいろ聞かさせてもらうから覚悟しとけよ！」  
「そうよねえ、二人のデートのお邪魔虫になっちゃおうかしら」  
「ま、ダブルデートだと思ってお手柔らかに...」

「ダ...ダブルデート？」  
よっぽど動揺したのか、途中でひっくり返ってしまった彼の声に、空を仰いで皆で笑った。

横浜駅西口市営地下鉄9番出口の階段を、二人は上がって来る。

「スケートなんて久しぶり。中学生の時、狐ヶ崎に良く行ったっけ」  
彼女はスリムのジーンズに白いコート。彼もスリムのジーンズにウエスタンブーツをはいている。  
「俺も久しぶり」

150m位歩いてスポーツセンターに着き、リンクを見渡す。  
元気な声をあげて追いかけっこをする子供達や、静かに滑るカップル、独り黙々と滑る上級者。  
金曜日の午後4時。多くの人達が左回りに滑っている。

シューズを借りてリンクに降りる。



彼も彼女も、スケートがあまりうまくない。最初は手すりに掴まりながら周回する。  
だんだんとカンを取り戻してきたところで、皆の列に加わり、手を繋いで滑り出す。

時折バランスを崩して倒れそうになるものの、互いに手をひき、何とか転倒を免れる。  
彼が、転んだ子供を避けようと向きを変えたとき、勢いがつきすぎて半回転してしまい、彼女と抱き合う形になる。  
それまで冗談を交わしていた二人が、一瞬真顔になる。次の瞬間には笑顔に戻り、何事もなかったようにまた滑り始める。

1時間半くらい滑って、二人はスポーツセンターを出る。

相鉄の改札口近くのイタリアンのお店に二人は入る。  
彼はボンゴレを、彼女はドリアを頼む。笑顔で楽しく会話を交わしながら、少し早めの食事だ。  
食後にはキリマンジャロ。二人ともブラックが好みだ。

店を出た後、ジョイナスに入りウインドーショッピング。  
4階から順に降りてきて、最後は地下2階のエスカレータ脇のベンチに座る。  
クリスマスの飾り付けの前で、共通の友人の話で盛り上がる。

明日から冬休みに入る。午前中にあった最後の講義に提出するレポートのため、二人とも昨夜は遅くまで起きていた。スケートで結構疲れたので、いつもよりは早いけれど、帰ることにした。

地下鉄に乗り込み、前から2番目の車両の3つ目のドア付近の席に並ん

で座る。  
桜木町あたりから、彼女は眠ってしまう。  
関内を過ぎた所にある大きな右カーブで、彼女は彼の肩に寄り掛かる。  
ぐっすり眠っているままだ。

彼も眠いのを我慢していたが、彼女が夢の中でくすっと笑うのを見た次の瞬間、眠りに落ちていた。

DOHC2気筒のバイクが国道1号線から右折してきた。  
そのまま3ブロックほど直進し、左手にある公園の脇にバイクを止めた。  
バイクに跨がったまま左足でサイドスタンドを出し、172kgの車重をあずけた。  
ステップに立ち上がり、右足を大きく後ろに振り出してバイクを降りた彼は、公園の中の公衆電話に向かって歩いていった。  
左手で受話器を上げ、ジープのコインポケットから10円玉を1つ取り出して投入し、電話をかけた。  
4つ目の呼び出し音が鳴り終わる瞬間に、受話器が上がった。  
いつもより少しすました口調の彼女に向かって彼は言った。  
「久しぶり」  
「先週会ったばかりじゃない」  
普段の口調に戻った彼女が答えた。  
「今日はとても寒いな」  
そう言いながら、彼は右手をブルゾンのポケットに入れた。  
ポケットの中には、自動販売機で買ったばかりの缶コーヒーがあった。  
横浜から160km程走り続けてきた彼の手には、その缶コーヒーは熱い位だった。

「窓から公園の方を見てごらん」

彼が言った。

「えっ？」

驚いた彼女は、受話器を置いて窓際に歩み寄り、右手に見える公園を見た。

2階の窓からは、ブルーのバイクと公衆電話の前で手を振る彼の姿が見えた。

「バイクで来たの？」

電話に戻った彼女は続けた。

「今すぐ行くから待ってて」

彼女が受話器を置いたのに続けて彼も受話器を戻し、傍らのベンチに座って缶コーヒーを開けた。

缶コーヒーを飲み、両手をあたためながら、彼女が近付いてくるのをじっと見ていた。

「これ ...」

と差し出す彼女の両手には、幅が25cm 位のラッピングされたものがあった。

「え？」

聞き返す彼に、彼女は答えた。

「この間貰ったぬいぐるみがとっても嬉しかったので、そのお礼なの」

3週間前に彼女が帰省する時、彼はちょっと早めのクリスマスプレゼントとして、彼女に大きなぬいぐるみをあげた。横浜駅から東海道線に乗って帰る時、彼女はそのぬいぐるみを袋に入れたりせず、そのまま左手で抱えていった。

「街を歩いていた時、ショーウィンドーの中に飾ってあるのを見つけたの」

と彼女が続けた。

彼は受けとった包みをほどいてみると、2つの貯金箱だった。

「ありがとう、とっても可愛いな」

「よかった、そう言ってもらえて。少女趣味って言われちゃうかもって思ってたんだ」

彼女は本当に嬉しそうに微笑んだ。

「この貯金箱が一杯になったらどうしようか？」

キリマンジャロを一口飲んだ後、彼が尋ねた。

「そうねえ ... どこか食事にでも連れて行って」

そう言ってコーヒーを飲む彼女のしぐさを、彼はじっと見ていた。